

大賞

平成のラッシュウミ

最近あっちゃんに気になるのは、マスク。

——なぜ、カゼでもないのに、マスクしているんだろう。

新型インフルエンザの流行で、マスクをした人が駅にも学校にもスーパーにも増えたけど、いつの間にか、身の回りの罹る人は罹ってしまったみたいで、気が付いたらすっかりニューズでもインフルエンザのことは言わなくなって、最近はおっぱら政権交代事業仕分け汚職問題の話題ばかりになっていた。でも、掃き損ねたホコリみたいに、マスクをした人間だけが町に残った。あっちゃんにとっては、マスクをした人間ほど不気味なものではなかった。咳き込むわけではない。人ごみにいるわけでもなく、ホコリが漂った汚い空気がたちこめているわけでもないのに、結構な人数（十人いたら三、四人だろうか）がマスクをしていた。マスクをした人間は、目だけがギラギラこつちを見ている。まるで監視カメラのようなどあっちゃんと思う。きつと、あの人たちは、体内に何か大事な組織を持っていて、それを守るために体の穴をできるだけ塞いでいるのかもしれない。そうすると、口は最も塞がなくてはならない。外から外敵が入

る。

あっちゃんは、素直に、この町をきれいだと思う。しかし、こんなきれいな町を歩くマスクが、あっちゃんはなおさら不気味で、怖かった。肩でもぶつかつた日には、あの監視カメラがあっちゃんのことをナイフのような鋭さとステンレスのような冷たさで睨み付けてくるに違いない……。あっちゃんはマスクをした人には、なるべく近寄らないようにした。

ある日のこと。あっちゃんは、諸用で町を離れて、少し離れた田舎の駅に来ていた。駅は、無人ではないものの一人駅員がいるだけで、そこから出るバスは二時間に一本だった。木でできた駅舎に、窓ガラスはなかった。傘貸します、と書かれた壁の下の傘掛けには、骨が折れた傘が一本おいてあった。いつのものかよくわからない、髪の毛が立派な女性がコカ・コーラのビンを持ったポスターがその横に張ってある。駅の向かいには、丸井商店という、何を売っているのかよくわからない店があった。看板犬らしき犬は、もじゃもじゃの毛が暑そうで、けだるそうにこつちを見ている。あと、見えるのは、木と、草と、どこに続くのかわからない道が横に一本、斜めに一本。駅員は、切符を回収した後、うちわで少なくて白い髪をなびかせながら、次のバスは三十分後だよ、といった。もっと、バスの時間にあつた電車に乗りたかつたのだけど、次の電車は、乗りたいバスが出た後の到着だった。

「じょうちゃんひとりかい」

つてくるだけではない。口は、組織の情報を外に漏らす可能性もある。そんな危険な穴は、そりゃ、塞いだほうがいいだろう。そう推理しつつも、もちろん、あっちゃんはその組織がなんなのかはわからない。あっちゃんが知りうる情報は、その人のギリギリ光った監視カメラからしか得られないのだ。

あっちゃんが住んでいる町は本当にきれいだ。開発されたのは、最近のことらしい。電車が通って以来、駅近くには洒落込んだファッションビルが建った。その駅を中心に、道は整然と東西南北に引かれて、平成の平安京かときえ感じられる。もちろん、駅から歩ける範囲に、郵便局、銀行、コンビニ、市役所、警察署、公園、レストラン、ビジネスホテルがある。道には案内板がいくつも踊る。四季にあわせた花々が、住民を楽しませる。そこから少し離れると、真新しい、レンガ仕立てをイメージしたようなマンション群がそびえ立つ。それらのマンションのベランダからは、観葉植物が青々と茂っていて、狭い庭にも置けるサイズの小さな遊具が顔を覗かせる。近くには、学習塾も多くて、夜になると迎えの親の車が子どもの帰りを待ってい

駅員があっちゃんに話しかけた。

「はい」

「そうかい、今日は暑いねえ」

まだ五月だった。でも、その駅は初夏を感じさせるほどに暑く、あっちゃんは、うちを出るとき着てきたカーディガンを今すぐにでも脱ぎたいと思つていたところだった。そこに腰掛けると良いよ、といわれて指差された椅子は、木でできていて、色あせた座布団が結び付けてあった。あっちゃんは、その椅子に座って、ぼーっと周囲を眺めた。久しぶりの風景だった。古びた町は、あっちゃんが今住んでいる前に住んでいた町に似ていた。いや、前住んでいた町は、もう少しきれいだったかもしれない。近くの駅には、自動改札もあつたし。でも、今住んでいる町があまりに「きれい」で、きれいでない駅に久しぶりに立つて、なんだか漠然と昔のことを想起してしまつた。時間が過ぎていく。聞こえるのは、はたはた小さく鳴る駅員のうちわの音と、ときどき吹き込む風でざわざわ騒ぐ草木の音だけ。長い長い三十分が一秒一秒すぎていった。

用事が済んで、自分の町の駅に着くと、いつもの光景が、いつものように広がっていた。空調の効いた駅内で、人々は自動改札にカードをあてて足早に抜けていった。この駅の改札は自動しかなかった。あっちゃんは、切符を改札に通した。いつも、自動改札を抜けた先で、（あれ、切符は出てこなくていいんだ

っけ」と悩んでしまう。自動改札といえば、当然、入るときは切符が出てきて、それを取って電車に乗って、降りるときは、切符は吸い込まれてしまう。でも、あっちゃんは切符が吸い込まれるのがどうも慣れない。前住んでいた町では、自動改札が二つ、その真横に有人改札が一つで、駅員の人がはいはいは、おかえりね、といいながら切符を回収していた。どうも、人の手がないと、切符が吸い込まれるのが正しいのかどうかあっちゃんには忘れてしまうのだ。きっと、切符の仕組みを、乗るとき降りるときで解釈しているのではなくて、人がどのような動きをしているかで覚えてしまったんだと思う。そう、降りたから、吸い込まれるんだよね、と自分を納得させて人の流れに任せて歩きだした。

歩きだした先の人ごみの中に、あっちゃんは、見覚えのある背格好の人物を見た気がした。目を凝らして見ると、それは、友人のA子の姿だった。

（あ、A子だ）

A子は、誰かを待っているようだった。自動販売機の前で、残りが半分くらいになったジュースのペットボトルのふたを開け閉めしながら、左右をチラチラ見ていた。何度かこつちを見たようだったけど、A子はあっちゃんの姿には気付かなかった。いや、気付いたのかもしれない。でも、彼女は「気付かなかった」という選択肢をえらんだのかもしれない。どちらが本当かは、わかるはずがない。

時間帯のせいかな、人は少なく、いつも何百というであろう人の数は、見る限り四、五人だった。あっちゃんは、人の流れにさらわれることもなく、A子のそばに駆け寄ってみた。

A子のそばに来て、あっちゃんはハットした。A子はマスクをしていた。A子の口は、不織布で真っ白に覆われていた。あっちゃんは、近づいてはいけけない、と、ひしと感じた。A子は今、人を退けているのだ。目という監視カメラで、周囲を警戒して、情報が漏れないように穴を封じているのだ。A子は今、他人が入ってはいけけない組織を、体の中にたたえているのだ。

——近づいてはいけけない。

あっちゃんは、その場から去ろうと思った。

——近づきたい。

でも、あっちゃんは、いつもきれいで便利でたくさんの人が猛スピードで出入りするこの駅で、誰かと触れ合ってみたかった。「人間」が駅にいることを確認したかった。駅に、人の有機的なそれを、感じたかった。A子がそこにいるのだ。

「あ……A子」

あっちゃんは、静かに近寄って、名前を呼んだ。

「あれ、あっちゃんじゃない。どうしたの、こんなところで。」
あっちゃんは、あっけに取られた。予想外に明るいA子の態度にすこし、驚いてしまった。でも、やはりカゼを引いている様子はなかった。

「うん、ちょっと、市役所に用事があって、駅のコンビニに行

あっちゃんは、声をかけようか迷った末、かけなかった。今日はずつと一人で長い時間移動していたから、見覚えのある姿が、一瞬あっちゃんの安心感と呼んだのは確かなのだが、あっちゃんは、A子に話しかけることができなかった。というのも、あっちゃんには、A子があっちゃんに「気付かなかった」のではなく、「気付かなかった」という選択肢を選んだ、ように見えたからだ。そして何より、そのときA子は、人ごみの一部だったからだ。とても、普段友人として接していたA子には見えなかった。そのときのA子は、A子でありながら、立派な「人ごみ」の一部だったのだ。

そのまま、A子を見つめて立ち尽くしていると、人ごみの誰かが、あっちゃんの肩にぶつかった。あっちゃんは、連れ去られるように、人ごみと一緒に流れ出した。急流の川のように流れている人の中で、ひとり、岩にひつかかった枯れ枝のように立ち止まっていたあっちゃんに、強い波がぶつかって、ついに枝も一緒に流されてしまったみたいだった。A子なんて、もう、どこにいるのかわからなかった。

またある日、駅にやってきた。今日は、駅前の市役所に用事があったからやってきたのだが、あっちゃんは、なんとなく、駅に顔をだした。今日も、A子がいるかな、という思いがあったからかもしれない。そうすると、そこにはやはり、A子らしき人物の姿があった。以前と同じように、自動販売機の前でペットボトルを持って、誰かを待っているようだった。今日は、

こうと思って、立ち寄っただけけど……。A子は？ これからどこかに行くの？」

駅のコンビニなんて、後付の理由だった。コンビニなんて、外にも、帰り道にもいくらでもある。

「うん、ちょっと……人を待っていて……」

A子は、お茶を濁すように答えた。そして、あっちゃんは、ああ、やはり、近づいてはいけなかった、と感じた。はじめの、明るいA子は、知り合いという私への、社交的な、表向きのA子だったのだ。マスクをしたA子は、所詮、私のことを監視カメラで見えていないんだった。

「あ、そっか、わたし、これからちょっと用事あるから、行くね」
ちよど電車が着いたようだ。大量の人が、ぞろぞろ、ぞろぞろと、こちらへ向かってくる。向かってくる。駅はまだ、無機のままだ。

あっちゃんは、その場から小走り、A子を後にしようとした。人ごみがまた、こちらに近づいている。あっちゃんが、A子から離れようとした瞬間だった。

「あっー」

あっちゃんの左の二の腕に、熱い何かが当たった。とっさにそこを見ると、白いあっちゃんの腕の真ん中に、1センチ程度の赤いハレが広がっていく。その上に少し黒いススのようなものが付いていた。明らかに、タバコの痕だった。近づいてきた人の流れの先頭の方を見た。そこには、確かに先端を赤く染め

たタバコをもって歩いている人物がいた。

「ひどい！ ちよつと言つてくる」

あっちゃんは、タバコの腕をつかもうと、右手を伸ばしながら走り出した。と、その瞬間、逆に左手を誰かにぐつとつかまれた。A子だった。

「なに」

あっちゃんは、憤りと一緒にA子を振り返った。

「いや……、よしなよ」

「え……」

「急いでるみたいだったし。そんなちつさなヤケド、すぐ治るよ。話しかけたら、もつと面倒なことになるよ。」

あっちゃんは、A子の予想外の台詞に、何も反応できず、すべての動きを停止してしまった。たぶん、息をするのも忘れていたと思う。人間は、いつも、ある程度自分の経験を使つて、次のことを予測しながら生きている。あっちゃんの経験では、とても理解できない現象が、今日の前で起きた。あっちゃんは、自分がわからなくなった。ただ、おそらく呼吸をすることを思い出してから、フツフツとこみ上げてきたのは、怒りだった。誰に対する怒りか、わからない。A子か、タバコか、人ごみか、この駅か、この町か。

あっちゃんは、怒りに任せたまま、A子のマスクに掴みかかった。

「いたいー！」

「うわああああああああああああ」

A子の顔からマスクを無理やりもぎ取つて、走り出した。ぞろぞろと流れるひとの流れに逆行して、何人も何人もぶつかりながら、走った。走った。走った。その途中、何人か、マスクをした人にもぶつかった。だけど、きつと冷たくするどい目で睨まれるとおびえていたその人たちは、何事もなかったみたいにあっちゃんを無視して、人の流れに流れていった。

人とぶつからなくなった、人がいなくなった、と感じて、意識もままならないまま周囲を見渡すと、そこは駅のトイレだった。薄ピンクのタイルの壁がまぶしくて、芳香剤がよよくにおつた。大きな鏡があっちゃんを出迎えた。鏡に映つたあっちゃんの左手には、A子のマスクがぐしゃぐしゃに握られていた。その二の腕には、白い肌に真つ赤な痕。痛かった。左腕だけじゃない。散々人にぶつかったからだろうか、全身痛かった。鏡の手前に目をやると、そこには緑色に透き通る100円ライターがおいてあった。誰のものは分からない。あっちゃんはおもむろにそれを手に取つた。カチツカチツと二回ほど擦ると火がついた。あっちゃんは、ぐしゃぐしゃになったマスクを、火に近づけた。火は、マスクにうつると、みるみるマスクを黒く縮れさせ、真つ白な煙を吐き出した。あっちゃんは、はらりとそのマスクを手放すと、静かにその煙を見つめた。

ジリリリリリリリッ、と耳をつんざくような音が鳴り響い

た。ただ今、一階東口トイレの火災感知器が作動しました。確認しておりますので次の放送にご注意ください。女性の声が、冷静に事態を伝え、サアサア細かい水があっちゃんに降りかかった。灰になったマスクは、水に濡れて、真黒にトイレのタイルにへばりついた。

あっちゃんは、マスクをそのままにして、また走った。走つて、走つて、ついに駅の外にでた。空調の効いていない外の空気は、むわつとあっちゃんの肌を一気に湿らせた。生ぬるい雨がぼつ、ぼつ、とあっちゃんの白い肌に触れた。あっちゃんは、それでも走った。どこに行くのかもわからなかった。雨も次第に強くなり、あっちゃんにふりかかる。それでもあっちゃんは走る。ただひたすら、離れたどこかを探して走った。何より離れた場所？ それもわからなかった。A子か、タバコか、人ごみか、この駅か、この町か。

疲れ果ててたどり着いた場所は、どこかのバス停の屋根の下だった。聞こえるのは、屋根の外をざあざあ降り続ける、雨の音だけ。あっちゃんは、ただ、ぼーっと雨を眺めた。時間が過ぎていく。あっちゃんは、なんとなく、このあいだ訪れた、あの、古びた駅での三十分を思い出していった。時間が過ぎていく。一秒一秒時間が過ぎていく。

その時、バシヤッとおっちゃんに大量の水が襲った。自動車に水たまりの水をはねたのだった。自動車たちは、雨で滑る道

路にまかせて、当然のように駆け抜けていった。一台、そしてまた一台と駆け抜けていった。そのたび、あっちゃんに大量の泥水が頭から靴の中までびしょびしょに濡らした。そして、また一台。

あっちゃんは、自分が濡れているのが、スプリングラーの水か、雨か、泥水か、また、涙なのか、よくわからなかった。ただ、「ごめんなさい」

と一言つぶやくと、とぼとぼ、雨の中を歩きたした。大雨の中、あっちゃんの姿は、すぐにかすんで見えなくなった。あっちゃんがどこに行つてしまったのかは、誰も知らない。